

〈ゴーシュ〉異聞

——「モダン語」としての「ゴーシュ」と「セロ」——

木村直弘

はじめに

宮澤賢治の童話「セロ弾きのゴーシュ」における主人公名〈ゴーシュ〉の由来については、「左の、歪んだ、振れた曲つた、不恰好な」^①あるいは「不器用な、へまな、下手な」といった意味のあるフランス語の形容詞gauche由来説、南ドイツの古い方言でカッコウを意味する名詞Gauch由来説^②、インド独立運動のリーダーで詩人でもあったオーロビンド・ゴーシュ (Aurobindo Ghose 一八七二—一九五〇) 由来説^③、「音・鳴子」を意味するサンスクリット語のśaṅṣā由来説^④、そして『春と修羅』『樺太鉄道』や『春と修羅 第三集』に用例がある幾何学用語の「ゴーシュ四辺形」関連説等々、多くの先行研究によって言及されてきた。この小論の目的は、これらに加えられるべき新たな視点、すなわち「ユーモア・モダ

ン語」由来説を提起することにある。

一 「モダン語」の時代

「モダン語」とは何か。「モダン」の語誌について、小学館『日本国語大辞典 第二版』では次のように説明されている。

明治時代から使われているが、大正末期から昭和初期にかけて大流行した語。当初「モダーン」ともいっていたが、すぐに「モダン」となった。この時期は、「モダンの時代」と呼ばれ、「モダンボーイ」「モダンガール」など多くの合成語が生まれた。^⑤

まさにこの「モダンの時代」＝「モダン語の時代」が賢治作品の創作期と重なっていることは言を俟たず、当然賢治も

この「モダンの時代」に流行った「モダン語」に日々触れていた。^⑦

たとえば、「賢治の童話制作の意図を図る上で重要」^⑧とされる、大正末期（一九二四年二月一日）刊行の『注文の多い料理店』広告文中にある「アドレッセンス」は、まさに当時の「モダン語」の典型である。そのことは、この時代に氾濫していた外来語、新語、モダン語関係の辞典^⑨の多くにこの語が項目立てされていることからわかる。

では通常の発音では「チェロ」と発音・表記される「セロ」についてはどうか。以下、賢治の没年までに公刊された外来語、新語、モダン語関係諸辞典における表記を列挙しておく。

- ① 「セロ (Cello)」「伊」「ヴィオロンセロ」の略。」（勝屋英造編『外来語辞典：附・新語及神話小解』二松堂書店、一九一四年、一三四頁）
- ② 「セロ ビオロンセロの略、其項を見よ。」（大畑匡山『現代文芸新語辞典』西村醉夢補筆、東条書店、一九一四年、二〇一頁）
- ③ 「Sero, n. Bioron-seroノ略。」（上田万年他編『日本外来語辞典』三省堂書店、一九一五年、二七三頁）
- ④ 「〔ヤロ〕 Cello. (英) ヴィオロン・セロ (Violon-cello) の略。西洋楽器の一種。」（芳野啓次郎『新しい語のポケット

ト辞典』博多成象堂、一九一九年、二四〇頁）

- ⑤ 「せろ ビオロンセロの略、其の項を見るべし。」（小林篤里編『現代日用新語辞典』文芸通信社、一九二〇年、一九六頁）

- ⑥ 「〔セロ〕 Cello (伊) ヴィオロンセロの略。西洋楽器の一種、大形ヴァイオリンのこと。」（小林花眠編『新しきことはの泉』博進館、一九二一年、七八五頁）

- ⑦ 「〔ヴィオロン・セロ〕 (Violon-cello) ヴァイオリンの大型のもの。」（新文化調査会編『現代智識 是さへあれば』文化書院、一九二三年、一一頁）

- ⑧ 「〔セロ〕 (Cello) ビオロンセロ (Violoncello) の略なり、バイオリンに似て大きく四絃を有す。」（竹内猷郎編『修正増補 袖珍新聞語辞典』竹内書店、一九二三年、三二九頁。ちなみに、一九一九年版、一九二〇年版には掲載されていない）

- ⑨ 「セロ (Cello 英) ヴィオロンセロ (Violoncello) の略。低音ヴァイオリン。ヴァイオリンよりも大きく両脚の間に挟んで直立せしめて奏する。」（田中孝一郎編『新らしい外来語の字引』実業之日本社、一九二四年、一八四頁）

- ⑩ 「〔ヴィオロン・セロ〕 (英) 単にセロともいふ。ヴァイオリンの大型のもの」（素人社編『現代語辞典』素人社、一九二四年、二八頁）

- ⑪ 「セロ ヴィオリン・セロを見よ。」（文化之日本社編『現

- 代語解説 下巻』文化之日本社、一九二五年、四七〇頁)
- ⑫「ヴァイオリン・セロ (英) Violoncello 西洋楽器の名。単にセロともいふ。ヴァイオリンの大型なもので膝に支へて奏する。」(秋山湖風・太田柏露編『最新現代用語辞典 第三版』明光社、一九二五年、二五頁)
- ⑬「【セロ】(英 Cello) 西洋楽器の一種で、大形ヴァイオリン、始め「ヴィオラ・ダ・ガンバ」即ち足に持つて弾くヴィオラ (ヴァイオリンの語訳) の意であつた。ヴァイオリンセロの略。」(高木斐川編『最新社会大辞典』(芳文堂、一九二五年、八五七頁)
- ⑭「○セロ ヴァイオリン・セロを見よ。」(文化之日本社編『模範的現代語講義 第五巻』偉大会、一九二六年、二〇九頁)
- ⑮「セロ Cello (英) 楽器。ビオロンセロ。Violoncello の略で、バイオリンに似て大きく四絃を有するもの。」(高信峽水・谷口武『デエリー新文化語辞典』啓明社、一九二六年、二四〇頁)
- ⑯「ヴァイオリン・セロ (英) 単にセロともいふ。ヴァイオリンの大型のもの。」(新語研究会編『新しい言葉は何でもわかる』ヤナセ書院、一九二六年、四二頁)
- ⑰「ヴァイオリン・セロ (英) 単にセロともいふ。ヴァイオリンの大型のもの。」(国民教育叢書刊行会編『外語から生れた新語辞典』内外出版協会、一九二六年、四二頁)
- ⑱「ヴァイオリン・セロ [Violoncello] 【英】単にセロともいひ、「ヴァイオリン」の大型のものにて膝にさへて奏するものである。」(秋山逸博・太田武次郎共編『昭和百科現代の常識』(中央書院、一九二七年、一七九頁)
- ⑲「【セロ】 ヴァイオリン・セロの略。」(日本青年社篇『新時代語辞典…国語熟語新語外来語』大興社、一九二七年、一九九頁。※日本青年社篇『新語辞典…日用便覧』(大興社、一九三〇年、三頁も同じ)
- ⑳「セロ (Cello 英) 伊太利語で「チェルロ」と呼ぶ。「バイオリン・セロ」の略で、「バイオリン」と同様の形をした大きな四絃楽器である。」(田中信澄編『音引正解 近代新用語辞典』修教社書院、一九二八年、四二六頁)
- ㉑「【セロ】 (Cello) ヴァイオリン・セロの略。」(有馬祐政監修『新外来語辞典』富文館、一九二八年、二一〇頁)
- ㉒「【セロ】 Cello (伊)「ヴァイオリンセロ」の項参照。」(高谷隆『新しい言葉の泉』創造社、一九二八年、四〇〇頁)
- ㉓「【セロ】 Cello (英) ヴァイオリンセロ (Violoncello) の略。ヴァイオリンに似て大きく、四絃を有するもの。」(藤本勇編著『現代常識百科辞典』朋文堂、一九二八年、六四一頁)
- ㉔「[Violoncello <音楽> セロ (=cello)、低音ヴァイオリン。』(荒川惣兵衛編『日本語となった英語』研究社、一九三〇年、九三頁)

- ②⑤ 「セロ Cello [Violoncello ヴィオロンセローの略]」〔音〕洋楽器の一種。形はヴァイオリンに似て大きく四絃があり、膝間に挟み床の上に立て、奏するもの。」(粟津清達編『最新外来語辞典』先進堂書店、一九三〇年、一一六頁)
- ②⑥ 「【セロ】 Sello (仏) ヴァイオリンの大型のもので膝に支へて奏でる。」(長岡規矩雄『時勢に後れぬ新時代用語辞典 増補版』磯部甲陽堂、一九三〇年、三八頁。※同『新時代の尖端語辞典』文武書院、一九三〇年、三八頁と同じ)
- ②⑦ 「セロ (cello) 〔伊〕ヴァイオリンに似た西洋絃楽器。」(小野半次郎編『英語から日本語となつた新しい言葉の手引』先進堂書店、一九三〇年、七四頁)
- ②⑧ 「【セロ】 (音) ヴィオロンチェロの意。」(モダン辞典編輯所編『モダン辞典』弘津堂書房、一九三〇年、一四八頁)
- ②⑨ 「セロ (Cello) ヴァイオリン、セロ (Violoncello) の略。大型のヴァイオリン。」(英文大阪毎日学習号編集局編『英語から生まれた現代語の辞典』大阪出版社、一九三〇年、七五九頁。ちなみに、一九二五年版には掲載されていない)
- ③① 「【ヴィオロン セロ】 (英) 単にセロともいふ。ヴァイオリンの大型のもの」(第一教育出版社編『現代新語辞典』日常便覧』第一教育出版社、一九三二年、二八頁)
- ③② 「セロ (英 Cello) 正しい発音はチェロでヴィオロンセロを略したもの。低音のヴァイオリンであるが、禪をしめる時のやうに顎の下に入れるのでは無く、両膝の間に立てて弾くものである。」(中山由五郎他編『モダン語漫画辞典』洛陽書院、一九三一年、二九四頁。※中山由五郎『モダン語新式辞典』(文啓社、一九三三年、二九四頁も同じ)
- ③③ 「セロ (cello) 【音】 ヴィオロン・チェロ (Violoncello) の略。その項を見よ。」(早坂二郎・松本悟郎共編『モダン新語辞典』浩文社、一九三一年、二三八頁。※福田正人編『モダン新語辞典』日満英独仏』(日本図書出版社、一九三三年、二三八頁も同じ)
- ③④ 「【セロ】 Cello (伊) 《音楽》 一種の弦楽器。低音ヴァイオリン。ヴァイオリン・セロ Violoncello の略。」(伊藤晃二『常用モダン語辞典』創造社、一九三一年、五八九頁)
- ③⑤ 「セロ 大提琴」(大阪毎日新聞社・東京日日新聞社編『毎日鑑附録 現代術語辞典』大阪毎日新聞社・東京日日新聞社、一九三一年、一〇四頁)
- ③⑥ 「【セロ】 Sello 大形のヴァイオリン。」(斎藤義一『超モダン用語辞典』中村書店、一九三一年、七九頁)
- ③⑦ 「セロ cello 〔英〕 大形のヴァイオリンのこと。」(現代新語研究会編『いろは引現代語大辞典』大文館書店、一九三一年、四一九頁)
- ③⑧ 「セロ (Cello 英) 大形のヴァイオリン。英語のヴァイオリンセロ (violin-cello) の略。」(藤村作・千葉勉編『現代語大辞典』一新社、一九三三年、三〇一頁)
- ③⑨ 「セロ/低音。」(社会ユーモア研究会編『社会ユーモア・

モダン語辞典』鈴響社、一九三二年、三八〇頁)

③⑨「セロ (伊 cello) [音] チェロと発音するのが正しい。ヴァイオリン・チェロの略。低音ヴァイオリンをいふ。」(改造社編『最新百科社会語辞典』改造社、一九三二年、六一頁)

④⑩「セロ (Cello) 【英】 ヴァイオリン形の極大きな楽器」(小坂潔『新式モダン語辞典』帝国図書普及会、一九三三年、一八一頁)

④⑪「セロ (cello 英) ヴァイオリン・セロの略。伊太利語ではチェロと発音す。」(千葉亀雄編『新聞語辞典』栗田書店、一九三三年、二〇六頁)

さてここで興味深いのは、英語教師でのちに『外来語辞典』(富山房、一九四一年)などを著す荒川惣兵衛が、一九三〇年刊の前掲②④で「セロ」と表記し、②④九三頁でも「violin-cello (音楽) セロ (= cello)、低音ヴァイオリン。」としているにもかかわらず、一九三三年に『外来語学序説』「モダン語」研究」を自費出版(同年、研究社より刊行)した際、もはや「セロ (cello) の時代に非ずして、チェロの時代である。」(一八七頁)と、この表記の問題について言及していることである。すなわち、「セロ」は「綴字的発音」に分類され、文字が輸入された当時、正しい発音の知識がなく「所謂「誤れる発音」(二三二頁)で「初め誤読して居て後に正読する語」(二

二二頁)の例として挙げられているのである。イタリア語でも英語でも、そしてフランス語でもcelloの発音は「チェロ」であるが、前掲リストでは「セロ」を英語由来としているものが多い。よって、たとえば英語のcell (細胞)の発音が「セル」なので、綴りが似ているcelloも「セロ」という短絡的な間違いがそのまま定着したということになる。^①

前掲③⑩⑪④⑫や荒川の書からもわかるように、正しい発音が「チェロ」であるという表記が出て来るのは一九三〇年代からであるが、依然として「セロ」も使われていたことが前掲リストからもわかるだろう。では、「ゴーシュ」はどうであらうか。

二 「モダン語」としての「ゴーシュ」

実は「ゴーシュ」もモダン語である。前掲の諸辞典中、「ゴーシュ」が立項されているのは、一九三一年以降に公刊された以下の三冊のみであるが、^⑫それぞれの説明は、「セロ弾きのゴーシュ」研究に資する貴重な情報を与えてくれる。

まず、③③伊藤晃二『常用モダン語辞典』(創造社、一九三一年一〇月二三日発行)三五八頁に、「【ゴーシチ】Gauche(仏)左。英語のレフトに同じ。」という項目が見られることから、「ゴーシュ」も「モダン語」として流通していたことがうかがえる。

次に、その翌年に刊行された③藤村作・千葉勉編『現代語大辞典』（一新社、一九三二年三月二八日発行）一四三頁には、「*gauche*（仏）左方。左側。左翼。」とある。¹³ここで重要なのは、従来の「*ゴーシユ*」フランス語由来説からなぜ外されてきた、最後の「左翼」という意味である。

そもそも「左翼」という表現はフランス革命由来であるので、英語ではなくフランス語を使用することは自然である。「一九二七、三、二六」の日付けが付された宮澤賢治の詩ノート所収「一〇一六「黒つちからたつ」」に「きみたちがみんな労働党になってから／それからほんとおれの仕事はじまるのだ」とあるように、労働農民党シンパであった賢治が、一九二八年二月の第一回普通選挙の前に同党稗和支部にカンパをしていたことが知られているが、同年の三・一五事件を始め、続く一九二九年、一九三〇年にも共産党員大検挙が行われるなど、当時「左（翼）」は、政府にとって「要注意」の対象であった。逆に言えば、「右」関係については各辞典でモダン語として全く立項されていないのも、この理由によると言えるだろう。

そして、最も重要なのが、前掲③社会ユーモア研究会編『社会ユーモア・モダン語辞典』（鈴響社、一九三二年四月二八日発行）である。全四〇〇頁で定価一円のこの辞典の概要を捉えるために、その大項目を挙げておこう。

●目次「七頁」…滑稽「二〇六九頁」／洒落「七〇〇八頁」／ユーモア文学「八九〇八頁」／隠語（芝居語―花柳語―男女学生語―露店商人語―刑事犯罪語―古今東西語）「二〇九〇一四五頁」／エロ語「一四六〇一六五頁」／異名諱名「一六六〇一七二頁」／符牒「一七三〇一八〇頁」／略語「一八一〇一八五頁」／諺語「一八六〇一九三頁」／俗語「一九四〇二〇四頁」／和製英語「二〇五〇二一四頁」／モダ（一）ン語「二一五〇三五一頁」／スポーツ語「三五二〇三六三頁」／兵語「三六四〇三七七頁」／音楽用語「三七八〇三八二頁」／附録（花言葉―国花―謡曲十五徳―歌舞伎十八番―相撲四十八手―主要俳優名鑑―碁の段位、初段以下の級―将棋の組階段位、駒の行き道、駒の位階―七曜の出来―活字の書体と其の大小―書籍の寸法―外来語の当字―時差―（以下見返し）郵便物のメートル法―メートル換算法「三八三〇四〇〇十二頁」

同書「緒言」によれば、この辞典は、「面白可笑しく世態人情の機微を道破」していた古人に比べ「この方面の趣味に無関心」になりがちな現代人のための「心機を一転し元氣更新の妙薬」となるべく「社会のあらゆる茶氣可笑味ある単語を網羅」した（二頁）、つまり、当時巷間に流布していた言葉をもとめたものである。よって、当時の世相を知るにはと

でも興味深い辞典なのだが、就中ここで注目すべきは、前掲「滑稽」の項中（二六頁下段）および「モダ（一）ン語」の項中（二五八頁下段）それぞれに、「ゴーシュ（仏）／唐変木、木念人。」という項目が立てられていることである。

ゴーシュ（仏）
唐変木、木念人。

つまり今回のこの表記の発見によって、当時、フランス語由来の「ゴーシュ」が、滑稽味をもとった「唐変木、木念人」を意味する名詞としてすでに流布していたことが明らかになった。このことは、〈ゴーシュ〉とは、賢治が「左の、不恰好な、不器用な」という初歩のフランス語形容詞を知っていてそこから「下手くそな」主人公の形容にも相応しい語として選んだ名前、という一般的理解からさらに一步踏み込むことを可能にする。この「唐変木、木念人」という意味は唐突にも思えるが、前述のように、当時右傾化する日本にあつて抵抗する「左翼」は、一般人の目には「唐変木、木念人」に映ったであろうことに鑑みれば、「ゴーシュ」が（フランス語であることによつて）暗に嘲笑・揶揄する表現¹¹「滑稽」語として人口に膾炙していた、と考えるもおかしくない。

結びにかえて

たとえば、前掲「ゴーシュ四辺形」が登場する『春と修羅』『樺太鉄道』に付された日付は「（一九二三、八、四）」、同じく「春と修羅 第三集」所収の詩「一〇一五」「バケツがのぼつて」に付された日付は「一九二七、三、二三」である。よつて、すでにこの時期から賢治がこの幾何学用語を知っていたのは自明だが、この童話の当初のタイトルは「セロ弾きのはなし」であり、最初から〈ゴーシュ〉という命名がイメー
ジされていたわけではない。

いずれにせよ、一九三二年四月刊行のこの辞典中に、「ゴーシュ」がすでに流布している語として収録されているということは、それよりも前から一般的な語であつたことは言を俟たず、もちろん賢治がこの辞典を参照したかどうかとも問題にはならない。僅か三例だが、一九三〇年代のモダン語辞典に「ゴーシュ」が立項されていることは、遅くとも昭和初期になつて、この語がモダン語の仲間入りをし、さらに、「モダン」だけでなく「滑稽」味を帯びた用い方がなされるようになっていたことを示す。それを知った賢治が、〈セロ弾き〉↓〈テイシウ〉↓〈ゴバー〉という命名の推移を経て最終的に〈ゴーシュ〉への修正を行ったとも考えられるだろう。

ではなぜ賢治は最終的に〈ゴーシュ〉を選んだのか。そこ

に「唐変木、木念人」的な含意があるとすれば、これらが、一九三一年頃成立と考えられている「雨ニモマケズ」にも登場する「デクノボー」とほぼ同義であることも看過されるべきではない。今回は紙幅の制限もあり論文文化は見送ったが、次稿では、今回の発見をふまえ、この〈ゴシシュ〉Ⅱ「唐変木、木念人」Ⅱ「デクノボー」という視角から、童話「セロ弾きのゴシシュ」について論じる予定である。

註

- (1) 藤原嘉藤治「詩集 春と修羅 語注」(続橋達雄編『宮澤賢治全集 第一巻(詩集乾巻)』十字屋書店、一九四〇年)三五頁。ちなみに、藤原嘉藤治は、この「セロ弾きのゴシシュ」への言及に先んじて、『春と修羅』における「ゴシシュ(四辺形)」について同様の語注をつけている。草野心平編『宮澤賢治研究』第五・六号(全集第一巻註解号)、一九三六年、四一頁参照。
- (2) 梅津時比古『《ゴシシュ》という名前——《セロ弾きのゴシシュ》論』(東京書籍、二〇〇五年)一六―二〇頁。
- (3) 原子朗『新宮澤賢治語彙辞典 第二版』(東京書籍、二〇〇〇年)二七〇頁。ただし、原は、直接的な関係はないだろうと推測しており、この推測部分は、同『定本宮澤賢治語彙辞典』(東京書籍、二〇一三年)の同項目の記述(二六九―二七〇頁)からは削除されている。
- (4) 杉山「ゴシシュの名の一つの仮定の由来」(『賢治研究』第四〇号、一九八六年)四三―四四頁。ちなみに、以下の拙論で、草稿中の書き間違いと見なされ校本全集で「ゴシシュ」と校訂されている「ゴシヤ」に関連して、サンسكريット語で「騒音」を意味する *ghosa* (*घोष*「ゴシヤ」)が含意されている可能性を指摘しておいた。木村直弘(「摩擦」〈震動〉〈感染〉——宮澤賢治「セロ弾きのゴシシュ」におけるトルストイの芸術論と石川三四郎の動態社会美学のインターフェイス——『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第一〇号、二〇一一年、五五―八四頁)。
- (5) 天沢退二郎「ゴシシュ」という命名をめぐって」(同『宮澤賢治』のさらなる彼方を求めて『筑摩書房、二〇〇九年)二六三頁。ただし、天沢は賢治が「ゴシシュ四辺形」という語を知っていたからといって、「普通の名詞・形容詞としての「ゴシシュ」というフランス語を知っていたというのは言いすぎ」としている。
- (6) 『日本国語大辞典 第二版』第二巻(小学館、二〇〇一年)二二八四頁。
- (7) 日本近代政治思想史学者・山室信一によれば、「モダン語」という言葉が人口に膾炙するのは一九二〇年代後半あたりからである。外にもこれに相当する言葉として「当用外来語・新外来語・当代語・新時代語・時代新語・新文化語・新意語・新術語・新造語・現代新語・現代術語・モダン用語・モダン新語・尖端語・尖锐語」等があるが、山室は「モダン語」をこれらを総称する語として定義している。山室信一「モダン語の世界へ——流行語で探る近現代」(岩波書店、二〇二一年)九頁参照。
- (8) 原、前掲書(二〇一三年)、一八頁。

(9) 詳しくは、山室、前掲書、巻末「モダン語辞典一覽」(一一一〇頁)を参照のこと。

(10) ちなみに、同書二三頁では「ヴァイオリン・セロ」(violin-cello)大型のヴァイオリンで、膝にさへて弾く。単にセロともいふ。」という説明があり、二一〇頁の「ヴァイオリン・セロ」という表記と異なっている。

(11) ちなみに、③②③⑤などに「S」から始まる表記がみられるように、発音も「セロ」であり、「セロ弾きのゴーシュ」を「チェロ弾きのゴーシュ」と読みかえるのは誤りである。

(12) ちなみに、今回調査した外来語、新語、モダン語関係の辞典類中、以下のものには「セロ」も「ゴーシュ」も立項されていなかった。生田長江編『文学新語小辞典』(新潮社、一九一三年)、上田万年・松井簡治『大日本国語辞典』第二、第三卷(金港堂書籍、一九一六、一七年)、小山内薫編『文芸新語辞典』(春陽堂、一九一八年)、生田長江等編『文学辞典』(新潮社、一九一八年)、下中芳岳編『ポケット顧問や此は便利だ! 増補改訂第二版』(平凡社、一九一九年)、時代研究会編『現代新語辞典』(耕文堂、一九一九年)、上田景二編『模範新語通語大辞典』(松本商会出版部、一九一九年)、梶康郎編『新式漢和大辞海』(大日本教育書院、一九二二年)、新知識研究会編『日用百科知識の華』(玉井清文堂、一九二二年)、勝屋英造編『通人語辞典』(二松堂書店、一九二二年)、木川又吉郎等編『現代大辞典』(大日本教育通信社、一九二二年)、松本重彦編『現代国語辞書』(一誠社、一九二三年)、紅玉堂編輯部編『活用現代新語辞典』(紅玉堂書店、一九二四年)、服部嘉香・

植原路郎『大増補改訂 新しい言葉の字引』(実業之日本社、一九二五年)、相田隆太郎編『改造新語辞典』(新潮社、一九二五年)、鈴木一意編『社交用語の字引: 新しい言葉・通な言葉・故事熟語』(実業之日本社、一九二五年)、文芸時代編輯部『文芸新語辞典』(金星堂、一九二六年)、玉文社編輯部編『常識百科精講』(玉文社出版部、一九二六年)、森田芳男編『実際に役立つ新撰語の字引』(弘英社、一九二六年)、公民協会編『昭和公民辞典: 新しい民衆語の解』(文泉社、一九二七年)、文化出版社編『現代語新辞典: これさへあれば』(文化出版社、一九二七年)、本間晴『新しい言葉の早わかり新語辞典』(学而書房、一九二八年)、国民教育研究会編著『現代常識国民百科大辞典』(国民書院、一九二九年)、法制時報社編『社会常識辞典』(法制時報社、一九二九年)、宮本光玄『かくし言葉の字引 改訂版』(誠文堂、一九二九年)、津田異根編『新かくし言葉辞典』(博進堂書店、一九三〇年)、東亜書院編輯所編『現代新語辞典』(東亜書院出版部、一九三〇年)、趙町幸二編『モダン用語辞典』(実業之日本社、一九三〇年)、鶴沼直『モダン語辞典』(誠文堂、一九三〇年)、現代編輯局編『現代新語辞典』(大日本雄弁会講談社、一九三一年)、小山湖南編『これ一つで何でもわかる... 附録付・モダン語と新主義学説辞典』(松寿堂出版部、一九三一年)、酒井歌彦 編書『実用新辞典: ペン字行草手本入 附・現代語辞典』(浩文社、一九三一年)、酒尾達人編『ウルトラモダン辞典』(一誠社、一九三一年)、矢口速 編『社会百科尖端大辞典』(文武書院、一九三二年)、山田清三郎 編『新文芸用語の字引』(白揚社、一九三三年)、中目覚『外来新語辞典』(博多成象堂、一九三二年)、趙町幸二編『モダン流行語

辞典』(実業之日本社、一九三三年)、中國民報社編『新聞語辞典』(中國民報社、一九三三年)、吉見文雄『現代いろは大辞典二現代語人』(忠文館書店、一九三三年)、栗田書店出版部 編『隠語辞典』(栗田書店、一九三三年)、大京社編集部 編『最新日本百科精典』(大京社、一九三三年)。

(13) ちなみに、賢治が没した翌月に刊行された④千葉亀雄編『新聞語辞典』(栗田書店、一九三三年一〇月一日発行)一二三頁にも全く同じ表記がある。実は、前掲リストを見てもわかるように、当時の辞書の説明には先行類書をそのまま踏襲したパターンが多い。

(14) ちなみに、上田万年・松井簡治『大日本国語辞典 第二巻 くゝし』(金港堂書籍、一九二八年一〇月八日発行)三六五頁には「くゝし しへんけい(英 Gauche quadrilateral)「――四辺形」(名)【数】各の辺が、同一の平面上にあらざる四辺形。」という項目が立てられている。当時「ゴーシュ四辺形」は、現代の我々が想像するよりは人口に膾炙していた語なのかもしれない。

〔付記〕 本稿は、JSPS科学研究費基金・基盤研究(C)(JP18K00495)による研究成果の一部です。